



お江戸舟遊び瓦版 1077号

水彩都市江東 ころろ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり
お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

金藤純子 「今すぐ逃げて！ 人ごとではない自然災害」 プレジデント社 24.8.9

はじめに

- 「今すぐ避難！ 東日本大震災を思い出して」「避難すること！」
2024年元旦に発生した能登半島地震のニュースで『叱るような口調』
で避難を呼びかけたNHKアナウンサーが大きな話題となった。
- なぜ、アナウンサーはこの強い呼び掛けをしたのでしょうか？
それは、人間の持つ「正常化バイアス」を打ち破るためです。人は、
危険な状況に置かれても、「なんとかなるだろう」と思い込んで心の
正常性を保とうとする働きがある。このため、日常生活でいちいち
心を惑わされず、疲弊しなくて済むメリットがあるのだ。
- この正常化バイアスは、災害が切迫しているときには命を落とす
ことにつながりかねない。「自分のところは大丈夫」となるのだ。
- 私が被災した2018年の西日本豪雨は、平成最悪の豪雨災害だった。これをきっかけに災害に
対する見方ががらりと変わった。東京低地帯にはたくさんの人が住んでいるが、荒川・江戸川
が氾濫すると、浸水継続時間は2週間以上、被害が深刻であることが予想されている。
- 「自分の住居はマンションの高層階だから、籠城すればいい」と思う人がいるが本当か？
水害に合うと、停電し、照明はつかず、冷蔵庫もエアコンも扇風機もスマホも使えない。断水
すると、飲料水も確保できなくなり、トイレを流すこともできない。スーパーにも行けない？
- 私は、被災経験がきっかけに、今では、楸エンパルを設立し、防災の啓蒙活動を行っている。



第1章 西日本豪雨で私の身に何が起きたのか

- 西日本豪雨は梅雨前線と台風7号が変化した温帯低気圧によって発生した「線状降水帯」が原因だった。7月の月平均雨量の2~4倍となる大雨となった。私のアパートと両親の住む実家が浸水被害に遭い、近所の用水路が溢れた。まさか2階までは浸水しないからと、両親とペットを呼び寄せ、家で待機していた。
- 2時間後の午前4時7分スマートフォンから緊急速報・避難指示で、両親を説得し車で、避難所の病院に、その2時間後駐車場に水が上がってきた。2階にも水が上がり、停電した。屋上に出るとあたり一面、湖の様だった。停電した病院内では、医師や看護師が懐中電灯で巡回し、200人ほどの避難者で溢れていても混乱はなく、その後自衛隊のボートで救出されました。
- 土手まで迎えに来てくれた同僚に最初に連れて行ってもらったのはユニクロで、着替え等を購入した。まちの1/4が冠水した真備町では決壊箇所から応急復旧が実施された。
- 家の片づけは想像を絶する過酷な作業で、木製の家具などは膨らんでいき、汚泥が入り込んだ家電は廃棄しました。1カ月半過酷な片付けが続きました。80代の両親は「もうあと生きて10年っじゃ。死んでもええケ、川辺に返らしてくれ」と訴えた。

第2章 なぜ毎年河川が氾濫するようになったの？

- 河川というのは『堤防と堤防の間』で、人の手で作られ、河川の整備は1/100年の雨が前提だ。計画が決まっても実行まではいばらの道で、住民との折衝、お金などが課題となる。
- 最近雨の降り方が非常に激しくなり、毎年のように大きな災害が全国どこかで発生している。気候変動・地球温暖化で、水害の更なる頻発・激甚化が懸念されている。

第3章 「公助」のハード対策はどれだけやっているの？

- ・ **浸水想定区域図・ハザードマップ**は 1/100 年の想定から、1/1000 年の想定最大規模も示すようになった。
- ・ ダムは農業用水・上水・発電等の**利水ダム**と、と川の氾濫をしないように水をためておく**治水ダム**があり、利水ダムの水位を高いままにしておくくと大雨で本当に溢れるので、協力しながらやっている。日本の電力に占める割合は 10%を切っている。
- ・ ダムの調査から完成まで、短いものは 20 年、長いものは 50 年を超える。ダムは環境を変え、**人間のエゴで環境を壊している**等と良くないという意見もあり、管理者側からの積極的な広報がまだ足りていないとも言われている。

第 4 章 激変する環境に対応する「流域治水」という考え方

- ・ 国の治水政策は、「**総合治水**」から「**流域治水**」へと転換しつつある。雨水が集まって来るエリアを「**集水域**」と言い、溢れた時に及ぶエリアを「**氾濫域**」という。最近の雨は、地球温暖化の影響もあり、毎年のように大きな災害が発生している。今までは氾濫域がないようにダムなどで河川管理者が対策する総合治水は、急激な都市化に対応する都市部の対策が中心だったが、増大する雨量の為、**流域のあらゆる関係者が協働して流域治水に転換**するようになりつつある。**田んぼダム**という取り組みも始まっている。

第 5 章 「自助」ってなんだ？

- ・ 「自助」とは、**自然災害から自分自身と家族の命と財産を守る**取組で、知る・備える・行動することで、先ず地域のリスクを知らなければならない。避難するときの判断材料の一つは河川の上流に降る雨だ。現代の私たちは、ヘリコプターやドローンで上空から見ることに慣れている。

第 6 章 「共助」ってなんだ？

- ・ 河川事務所は、「**真備版マイ・タイムライン**」を作って小学校にも配布しているので充分やと満足していたら、介護事務所から**役に立たない**と言われ「えー！」と驚いたそうだ。
- ・ マイ・タイムラインは、基本的に「どこに・いつ・誰と・どうやって避難する」を前提に作っているが、高齢者や障害者は自ら逃げられないから命を落としてしまうのだ。
- ・ 要配慮者マイ・タイムラインは作る以上に、実践することが大切で、河川事務所の**職員が出向いて**、ご近所の方やケア・マネージャーも集めて個別に作成する手伝いが必要だ。
- ・ 要配慮者マイ・タイムラインの作成過程を題材とした「岡谷さんのマイ・タイムライン」というマンガやミニドラマが作られた。ドラマは劇団オイボクケシ ([OiBokkeShi 「老いと演劇」](#) [オイ・ボクケ・シ](#)) が制作している。94 歳の劇団俳優が要配慮役になり、大雨が降った時の避難について、家族や近所の方々、福祉事務所署員が**一緒に考えて行くシナリオ**だ。
- ・ 濱田さんは、「**防災はコミュニティだ**」と言い、ヨガ教室を続けている。「月一回でこれしか人数がないのに何の意味があるのか」と思っていたが、**顔なじみ**ができ、お互い話しやすくなれば、災害だけでなく、困った時に助け合えるようになっていく！ コツコツ継続が大切だ。

第 7 章 エピローグ ゆるやかな縁で命が助かるまちづくり

- ・ 私たち家族は 1970 年代に水害の歴史を知らずに引っ越してきた。その後、2011 年から地域の**防災訓練や啓蒙活動**を進めている**松田さん**に出合った。松田さんは結婚を機に川辺に住み始めた方で、「嫁いだ時から夫から『ここは昔、**洪水**がよく起きるから天井に**舟**が括り付けてあって、その舟で逃げたこともある』という話を聞かされた」そうだ。水害常襲地帯の水除の知恵「上げ舟」のことで、ある朝、天啓にも似た**閃き**があり防災の運動をやり**始めた**と伺った。
- ・ 共助を機能させようにも、**町内会**が最早機能しない。**一人暮らし**の人が多くなり、町内会に入らない、**地縁血縁では助からない地域社会**になってしまっている。
- ・ **地域のボランティア活動と仕事**を通じてそんな**社会**をつくりたいと思うようになった。

所感：元旦の能登半島地震を始め、日本は**災害大国**だ。町会や自治会や地域のボランティア活動などを通じて、地域の**コミュニティ**を再生することが、今こそ防災には必要だ。 (文責 中瀬)